



2022年：STELLAR ODYSSEY

ジャガー・ルクルトは、宇宙現象と計時の原点、
そして時計製造の技術革新の結びつきを称えます

2022年、ジャガー・ルクルトは、ステラ オデッセイを開催し、計時の原点である天文現象にオマージュを捧げます。ジャガー・ルクルトにとって天文現象は非常に重要です。惑星や星の動きが計時に欠かせないからというだけでなく、マニファクチュールの時計職人たちにインスピレーションを与える天体ショーの観測に最適な澄み切った夜空が広がるジュウ渓谷にその本拠地があるからです。

最初、経過時間を求めるために惑星や恒星の動きが使用されていました。その後、これらの計測結果に従って、置時計や腕時計の機構の構成が決まりました。現在では、才能ある時計職人たちが天文現象を新たに解釈し、それらを手首に着用する精緻な複雑機構という形で表現しています。

マニファクチュールの草創期より、天文に関する機能は、ジャガー・ルクルトが誇るコンプリケーションウォッチのポートフォリオにおいて重要な役割を果たしてきました。太陽、月、恒星を用いた3種類の時間単位をすべて習得したジャガー・ルクルトの時計職人たちは、絶えず革新を続け、天文現象を表示するだけでなく、予測まで行う極めて高度で正確な機構を製作しています。2022年、この素晴らしい遺産に敬意を表し、約190年に渡り培われてきた専門技術を新たな方法で表現した天体腕時計の新作ラインナップが脚光を浴びます。このステラ オデッセイは、これらのタイムピースの美しさを称えるとともに、計時の原点や時計の始まりそのものをダイレクトに想起させます。

ステラ オデッセイ

2022年から始まるステラ オデッセイは、ジャガー・ルクルトが世界各地で開催するテーマイベントであり、まさに文字通りのオディッセイ（長期の冒険旅行）です。お客様や一般の方が、手首に装着される極小の驚異的な機械が宇宙の謎をどのように表現するか知る絶好の機会となります。ステラ オデッセイ展は3月の **Watches & Wonders** において初披露され、これを皮切りにワールドツアーを開始します。この展覧会では、時の歴史を振り返り、天体からインスピレーションを得たジャガー・ルクルトの最新モデルを披露します。また、来場者をバーチャルツアーで宇宙へと誘う体験型マルチメディアインスタレーションも展示されます。**Atelier d' Antoine**（アトリエ・ド・アントワヌ）の2022年体験型ディスカバリー・ワークショップのプログラムでは、天文複雑機構の驚異と計時の原点となった天体に焦点を当てます。この体験を仕上げるものとして、様々な分野の職人やクリエー



ターたちとの最新コラボレーションとして、ジャガー・ルクルトは有名なミクソロジスト（バーテンダー）のマティアス・ジルーに、宇宙に着想を得た、ジュウ溪谷のフレーバーを使用した極上のカクテルメニューの作成を依頼しました。

「今年、ステラ オデッセイは、天空のテーマにインスピレーションを得たジャガー・ルクルトのクリエイションを共有するだけでなく、天空の世界の驚異をインスタレーションアートや体験として表現することで、世界各国を巡るマニュファクチュールの旅を続けます。アトリエ・ド・アントワヌは、ステラ オデッセイをテーマにした新しい教育ワークショップを導入することで、時計製造のノウハウの伝達に新しい側面をもたらします」カトリーヌ・レニエ、ジャガー・ルクルト CEO

時の原点

初期の人類は定期的に現れる特定の自然現象を観察していました。当初、時間の経過は、太陽が空を移動して暗闇が明るくなることと認識されていました。この経過時間を計りたいという欲求が、狩りや収穫、食事、睡眠、社交など、自然に太陽の周期に従っていた日課のために生まれました。

古代エジプト人とバビロニア人は、昼間を 12 等分し、直立したオブジェクト（グノモン）の影が目盛りを移動する日時計を開発しました。その後、彼らは夜間を 12 等分し、1 日を 24 時間としました。1 時間あたりの長さは 1 年を通して変化しました。それは冬より夏の方が日照時間が長く、夏より冬の方が夜間の時間が長いからです。ギリシャの天文学者のヒッパルコスが、春分の日や秋分の日を 24 等分した時間を年間を通して使用することを提唱しましたが、14 世紀に機械式時計が出現するまで、1 時間の長さを固定することは一般的ではありませんでした。

1000 年の間に、天体周期を再現し、天文現象に対する科学者の理解を深める計器が発明されました。ヘレニズム時代に発明され、8 世紀以降広く使用されたアストロラーベは、平面に宇宙が描かれており、持ち運びができるものでした。初期の天文学者らが様々な天体の関係性を知ることができたアストロラーベは、天文学、占星術、航海術、宗教に応用されました。

ルネサンスは宇宙について新たな理解をもたらしました。古代ギリシャにおいてサモス島のアリストアルコスが（太陽を中心とする）地動説の仮説を唱えていましたが、コペルニクスが太陽系のモデルについての著書を出版した 1543 年まで、（静止している地球の周りを太陽と惑星が回っている）天動説が広く信じられていました。地動説の広がりにより、太陽に対する地球と月の相対位置や動きを示す三球儀（テルリウム）として知られる立体的な機械模型が開発されました。

天文学者は、たびたび時計製作に強い関心を示してきました。初めて振り子、つまり最初の「振動子」の計時特性に気付いたのはガリレオでした。ヨーロッパでは、14 世紀に機械式時計が登場しましたが正確な計時にはほど遠いものでした。オランダの天文学者であり物理学者であったクリスティアー



ン・ホイヘンスが 1656 年に振り子時計を発明し、突破口が開かれました。その後、天文学と時計学は互いに協力しながら共に発展していきました。

発明への強固な精神に駆り立てられ、アントワーン・ルクルトは 1833 年に時計製造工房を立ち上げ、群を抜いて包括的なマニュファクチュールとなるための標準を打ち立てました。時計師であり発明者であるジャガー・ルクルトの時計職人たちは、シンプルなムーンフェイズ表示から非常に複雑な永久カレンダーや星図に至るまで、あらゆる形態の天文複雑機構に精通しています。彼らは、腕時計のケースの小さなスペースに宇宙現象を再現し、天文複雑機構を他の機能と組み合わせてグランド・コンプリケーションを製作することもあります。これらの素晴らしいキャリバーを多くの主要なメゾンが自社の時計のために購入しました。そのため、ジャガー・ルクルトには、「ウォッチメーカーの中のウォッチメーカー」というニックネームが付けられました。

時の不規則性

時計製造では、天体の様々な周期の値を使用して時間を計測しますが、一般に使用される常用時の 1 単位は、地球周期の平均値に基づく近似値です。実際の値と近似値の差が、正確なカレンダーの製作をはるかに複雑にしています。

紀元前 100 年頃、エジプトの天文学者は、季節を一巡して太陽が天空の同じ位置に戻るまでの時間を観測することによって 1 年の長さを計っていました。しかし、太陽年（回帰年）は 365.242189 日（通常は平均 365.2425 日）であり、私たちが使用している 365 日の暦年より約 6 時間長い時間です。

紀元前 46 年にユリウス・カエサルが導入したユリウス暦では、1 ヶ月が 30 日または 31 日である 12 の月に分割されました。これは太陽年より約 6 時間短いため、補正するために 4 年毎に 2 月に 1 日を追加しましたが、この補正は大きすぎたため、1582 年にローマ法王グレゴリウス 13 世が閏年をいくつか廃止し、太陽年と暦年の差を 27 秒内に収めました。現在も使用されているグレゴリオ暦によると、年を 4 で割り切れる場合は閏年ですが、100 で割ることもできる場合は閏年ではありません（たとえば 1900 年、2100 年）。ただし 400 で割ることができれば閏年（2000 年、2400 年）になります。

1 ヶ月の長さが異なり、閏年もある、この暦の不規則性は、時計職人たちを大いに悩ませます。このような不規則な事象に対応するためには、非常に複雑な歯車システムが必要になるためです。トーマス・マッジが、1762 年に最初の懐中時計の永久カレンダー機構を発明しました（それ以前にこの機構が組み込まれていたのは置時計のみ）。しかし、その偉業は複雑であったために、150 年間再現されることはほとんどありませんでした。19 世紀末以降、ジャガー・ルクルトは複雑な永久カレンダーをマスターするとともに、それを他の複雑機構と組み合わせて、グランド・コンプリケーションのムーブメントを製作しました。



ワールドタイム

時の経過は太陽の周期に基づいており、初期の航海士を含む人類は、日の出と日の入りの時刻が地点によって異なることに気付いていました。18世紀に海上貿易が発展し、19世紀に鉄道旅行が発展すると、時刻の標準化のニーズが明確になってきました。それまでは、都市にはそれぞれ独自の現地時間があり、毎日、太陽が南中に到達したとき正午にセットしていました。

1884年の国際子午線会議にて、ロンドンのグリニッジ天文台を世界の時刻の基点となる本初子午線（経度 0°）とすることが決められました。世界の常用日は、グリニッジの真夜中を日界とする平均太陽日となりました。後にこの考え方を世界全体に適用し、現在使用されている、世界を均等に 24 分割したタイムゾーンが制定されました。

20世紀に旅行が盛んになると、異なるタイムゾーンが一目で分かる時計の需要が生まれ、ワールドタイム、続いて GMT やデュアルタイムウォッチの開発を急ぎ立てました。これらはすべて、太陽時の標準化を原点としています。ジャガー・ルクルトは、これらの複雑機構の卓越した専門技術を開発してきました。そして、アラームを搭載した初のメモボックス・ワールドタイマー、デュアルタイム機能を搭載したレベルソ・デュオ、非常に複雑なデュオメトル・ユニーク・トラベルタイム、24 時間に 1 回転するダイヤルで地球の自転をリアルに表現するキャリバー948 などの革新的技術を生み出しました。

星座の秘密

かつて「神々のヒナギク的首飾り」と呼ばれていた星々は、いつの時代も人々を魅了しています。人間は生まれつきパターンを認識するので、古代文明では星の集まりを特定して名前を付けました。それが星座です。星座の形は、観測者に動物や神話の登場人物を連想させ、古代社会では、星座の位置が変化することは、神々がメッセージを伝えたり、物語を語っていると考えられていました。星座には実用的価値もありました。星座の位置が航海を助け、作物の種まきや収穫をする時期を教えてくださいました。

紀元前 130 年頃、ギリシャの天文学者のヒッパルコスが初めて正確な星図を作成しました。それより 1000 年ほど前からバビロニアの天文学者や、紀元前 400 年頃の中国の天文学者の甘徳がそれ以前にも星図を作成していましたが、以降ヒッパルコスの星図が西洋天文学の基礎となりました。現在、88 座の星座が認識されていますが、私たちが最もよく知っているのは黄道十二星座です。これらの星座は黄道（天球上における太陽の見かけ上の通り道）を挟む帯の中に位置しており、地球が太陽の周りを回るとともに見える位置が変わります。

この計時における天空の側面を際立たせるため、ジャガー・ルクルトの時計職人たちは、ジュウ溪谷のマニュファクチュールから眺められる星座と同じように星座の位置をリアルタイムに表示できる機構を発明しました。キャリバー945 に導入された天空表示の複雑機構は、常用時ではなく、星々を基



準とする恒星時の経過を表示します。伝統的なカレンダーでは数字から時の経過を認識しますが、この恒星カレンダーと星図は文字通りの美しい魅力的な方法で、人類と宇宙のつながりをダイレクトにダイヤルに表示します。

月の魅力

知られている最古のムーンフェイズ機構は、ビザンチンの日時計カレンダーで、機械式腕時計より1000年以上も前にありました。私たちは常に裸眼で月の位相の変化を簡単に観測できますが、時計職人たちは、月の周期をより正確に表示するという挑戦に魅了され続けています。

この伝統的な複雑機構の構造は2世紀の間基本的に変わっていませんが、ジャガー・ルクルトは、その精度や機械効率を改良し、他の複雑機構と組み合わせ、全く新しい月の複雑機構を開発することに挑戦しています。ジャガー・ルクルトは、月の朔望月周期（私たちに最も馴染みのある、新月から次の新月までの29.53日）に加え、近点月周期（月の楕円軌道上において地球に最も近づく近地点から近地点に戻る時間を基準とする一ヶ月）と交点月周期（月の軌道が黄道と交差するときを示す）を表示し、この技術力をさらなる高みへと押し上げます。

2021年、ジャガー・ルクルトは時計史において初めて、この3つの月の表示を一つの腕時計に搭載したレベルソハイブリス・メカニカ・キャリバー185を発表しました。この驚異的なマイクロメカニカルモデルによって、日食や月食、スーパームーンなどの希少な現象を確認することができます。

予測不可能な星々

惑星や恒星の動きは決まっており、測定可能ですが、注目すべき例外があります。それは流れ星です。流れ星は、実際は星ではなく、彗星の尾の残骸が地球の大気圏に突入した際に燃えて明るく輝くのです。この現象は予測不可能で一瞬で消えるので、時計製造を左右する計測可能な一定のリズムと正反対です。にもかかわらず、ジャガー・ルクルトは史上初めて、完全に無作為に出現する流れ星を再現する機構の製作に成功しました。

このロマンティックで幻想的な複雑機構は、女性らしいランデヴーコレクションのために特別に作られました。星のように浮かんで見える、煌めくダイヤモンドがクローセットされたベゼルがダイヤルを囲み、夢のような手描きの天空に流れ星が現れます。

半永久運動

ジャガー・ルクルトにとって、ごくわずかな気温の変化を利用することによって自動で完璧に動作するアトモスの永久的な動きは、果てしなく続く宇宙の象徴です。90年前に発明されたアトモスは魅力的なオブジェクトであり続けています。機構のデザインの美しさは、見かけの不思議な動き方以上に魅了的です。1990年代末にムーンフェイズ表示を備える最初のアトモスを製作して以来、



ジャガー・ルクルトは、アトモスのために天文複雑機構の開発を続けています。今年は、地球と月両方の年周期と月周期を同時に再現する並外れた新しい複雑機構を発表します。

テクノロジー、伝統、芸術性のマリアージュ

1833 年以来、ジャガー・ルクルトは、シンプルなものから複雑なものまで、430 件以上の特許を発明し、1300 種類以上のキャリバーを製作し、独創性に対する比類なき名声を築いてきました。2022 年、極めて広範囲で深い専門技術を活かし、宇宙とその様々な周期の発見の旅へ乗り出します。

新たに解釈された豪華なジャガー・ルクルトのユニバーサルタイム キャリバー、マスター・グランド・トラディション キャリバー948 が地球の自転を表現します。卓越したキャリバー945 の新たに解釈された 2 つの芸術的デザインによって、私たちが地球から眺める壮大な星座が手首の上に再現されます。魅力的な技術的複雑さと日常の実用性を兼ね備える、新しい永久カレンダーが、ポラリスコレクションを充実させます。夜空に魅了され続けているマニファクチュールの時計職人たちは、女性らしいランデヴーコレクションのために、珍しい流れ星の魅力を新しい複雑機構に収めました。そして、息をのむようなアトモス ハイブリス・メカニカ キャリバー590 が太陽を周回する地球と月の周期を再現し、永遠に続く宇宙をアトモスに表現します。

ロマンスと独創的な技術を醸し出す、2022 年に製作された天体のタイムピースは、1 本 1 本が機械技術と芸術的ノウハウの小さな傑作の一つであり、マニファクチュール特有の精神を完璧に体現しています。

STELLAR ODYSSEY について

2022 年、ジャガー・ルクルトは、人類が時間を計測する方法のまさに原点となった天文現象にオマージュを捧げます。シンプルな形状のムーンフェイズ表示から、極めて複雑な永久カレンダー、均時差、星図、交点月周期、近点月周期に至るまで、天文学的な機能は、マニファクチュール創設時から、ジャガー・ルクルトが誇る複雑時計のポートフォリオにおいて重要な役割を担ってきました。太陽、月、恒星を用いた 3 種類の時間単位をすべて習得したジャガー・ルクルトの時計職人たちは、絶えず革新を続け、天文現象を表示するだけでなく、予測まで行う極めて高度で正確な機構を製作しています。今年、ジャガー・ルクルトは、体験型展示会や一連のテーマ別イベントを開催する **Stellar Odyssey** を開始します。ビジュアルアーティストやミクソロジスト（バーテンダー）とのインスピレーションに溢れたコラボレーションや、**Atelier d'Antoine**（アトリエ・ド・アントワーヌ）における、天空がテーマの「ディスカバリーワークショップ」といった魅力溢れるプログラムも開催されます。**Stellar Odyssey** では、宇宙の神秘が、腕から覗くマイクロメカニカルの驚くべき技術の世界へといかに昇華されたかご覧いただけます。